小児慢性腎疾患の予防，管理に関する研究 ―まとめ―

酒井　糾

北里大学病院　腎センター

我国において，慢性・重症・難治の経過を辿り透析療法に至る成人腎疾患患者は年間およそ1万人とされているが，小児にあってもその中の1％前後，つまり100人位は毎年透析療法へ導入されるとする数字がだされている。

さて，検尿による腎疾患スクリーニング（集団検尿）を腎疾患予防対策の観点から把えるためにはこのような事実を踏まえて考える必要がある。

従来，腎疾患の予防対策としては第一段階から第三段階が必要とされて来た。即ち発症を予防する根本的な手段（疾病発症体質の研究やワクチンの開発等），これを第1次予防とし，次に自覚症状とは無関係に早期発見・早期管理とする段階（集団検尿等の検診）を第2次予防，そして最後の第3次予防がこれら発症予防に対するもので悪化予防，つまり，きちっとした生活指導と医療管理で疾病の進展阻止を意図するものである。

これらはまさしく腎疾患ケアーシステムを考える上での基本概念となるもので，今回組織されている研究班のテーマがこれらの考え方の上に展開されているのは云うまでもない。

今年度の各班の研究についてみると，まず腎疾患の遺伝に関する研究班では腎疾患に関する免疫遺伝学的研究が各施設から報告され，その中の一つ“溶連菌に対する免疫応答と腎炎発症の遺伝的制御”が代表講演された（溶連菌あるいは他の外来抗原に対する免疫応答性の関与の可能性が示唆された）。次に小児期腎疾患の早期発見に関する研究班では三歳児検尿の現状と問題点に関する研究および集団検尿におけるスクリーニング項目として新たに超音波診断，尿比重検査，尿中β_2マイクログロブリン測定，等を組み込むことについての研究が各々数施設より報告され，その中の一つ“胎児・新生児・乳幼児期における腎・尿路疾患の超音波検査による早期診断”が代表講演された。もう一つの発症予防に関する研究班である小児慢性腎疾患の予防と管理基準に関する研究では，集団検尿の検診方式の検討と運動処方についての研究が各々数施設より報告され，その中の一つ“腎疾患検診の現状と今後の方向について”が代表講演された。そして最後の慢性腎炎・腎不全の疫学に関する研究班では主として腎不全の管理と治療そして疫学に関する研究が6施設より報告され，その中の一つ“小児腎不全の疫学と治療について”が代表講演された。

本年度は研究班が組織されて2年目にあたり，可成りの成果が認められいよいよ3年目の一つの区切りに入ろうとしている。各れの班の研究も短期間で達成されるものでなく今後共，半永久的に続けられるものばかりであるが，とりあえずまとまったものとして次年度，小冊子の形で“小児慢性腎疾患の予防と管理基準”を編纂する予定である。

検索用テキスト　OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

小児慢性腎疾患の予防,管理に関する研究－まとめ－

酒井　糾　北里大学病院　腎センター

我国において,慢性・重症・難治の経過を辿り透析療法に至る成人腎疾患患者は年間およそ1万人とされているが,小児にあってもその中の1%前後,つまり100人位は毎年透析療法へ導入されるとする数字がだされている。

さて,検尿による腎疾患スクリーニング(集団検尿)を腎疾患予防対策の観点から把えるためにはこのような事実を踏まえて考える必要がある。

従来,腎疾患の予防対策としては第一段階から第三段階が必要とされて来た。即ち発症を予防する根本的な手段(疾病発症体質の研究やワクチンの開発等),これを第1次予防とし,次に自覚症状とは無関係に早期発見・早期管理とする段階(集団検尿等の検診)を第2次予防,そして最後の第3次予防がこれら発症予防に対するもので悪化予防，つまり,きちっとした生活指導と医療管理で疾病の進展阻止を意図するものである。

これらはまさしく腎疾患ケアーシステムを考える上での基本概念となるもので,今回組織されている研究班のテーマがこれらの考え方の上に展開されているのは云うまでもない。

今年度の各班の研究についてみると,まず腎疾患の遺伝に関する研究班では腎疾患に関する免疫遺伝学的研究が各施設から報告され,その中の一つ‘溶連菌に対する免疫応答と腎炎発症の遺伝的制御"が代表講演された(溶連菌あるいは他の外来抗原に対する免疫応答性の関与の可能性が示唆された)。次に小児期腎疾患の早期発見に関する研究班では三歳児検尿の現状と問題点に関する研究および集団検尿におけるスクリーニング項目として新たに超音波診断,尿比重検査,尿中β2 マイクログロブリン測定，等を組み込むことについての研究が各々数施設より報告され,その中の一つ“胎児・新生児・乳幼児期における腎・尿路疾患の超音波検査による早期診断"が代表講演された。もう一つの発症予防に関する研究班である小児慢性腎疾患の予防と管理基準に関する研究では,集団検尿の検診方式の検討と運動処方についての研究が各々数施設より報告され，その中の一つ“腎疾患検診の現状と今後の方向について"が代表講演された。そして最後の慢性腎炎・腎不全の疫学に関する研

究班では主として腎不全の管理と治療そして疫学に関する研究が 6 施設より報告されその中の一つ “ 小児腎不全の疫学と治療について"が代表講演された。

本年度は研究班が組織されて2年目にあたり,可成りの成果が認められいよいよ3年目の一つの区切りに入ろうとしている。各れの班の研究も短期間で達成されるものでなく今後共,半永久的に続けられるものばかりであるが,とりあえずまとまったものとして次年度,小冊子の形で “ 小児慢性腎疾患の予防と管理基準"を編纂する予定である。